

移民史を「場所」に刻印すること： サンフランシスコ日本町保護運動を事例として

佃 陽 子

はじめに

「サンフランシスコ日本町は、アメリカにたった三箇所しか残っていない日本町の一つである¹⁾。」1990年代末以降、カリフォルニア州の日系アメリカ人コミュニティ指導者たちは、都市部の日系エスニック・エンクレイブ（サンフランシスコ日本町、ロサンゼルス小東京、サンノゼ日本町）の衰退に懸念を表明するようになり、それらの持つ歴史的・文化的価値を保存し、保護・発展させるための運動を開始した²⁾。

「日本町」はもともと19世紀末から20世紀初めに渡米した日本人移民たちによって形成されたものである。多くの日本人移民たちは言語やその他文化的な差異からアメリカ主流社会に即座になじめず、人種差別や経済的な困窮から白人と同じ地域に居住できなかつたため、特定の地域に集住した。過去アメリカにやってきた移民のほとんどがそうであったように、移民の集住地域では同じ国や地域からの移民を顧客とするエスニック・ビジネスが発展し、宗教組織をはじめとする互助的なコミュニティ組織が生まれ、エスニック・タウンとして繁栄した。第二次大戦前、「日本町」はカリフォルニア州だけで40箇所以上あったといわれている³⁾。

だが、アメリカで生まれ、教育を受けた移民の子孫はやがてアメリカ主流社会に同化し、都市のエスニック・エンクレイブから郊外の居住区へ離散し、エスニック・コミュニティとの紐帯を必要としなくなっていた。本国からの新しい移民が流入しないエスニック・グループでは、エンクレイブはその必要性を徐々に失い、縮小あるいは消滅に至った。

1990年代、多文化主義を推進するアメリカ政府は、衰退もしくは消

滅してしまったエスニック・エンクレイブをアメリカ社会における歴史的・文化的遺産として保存する運動を積極的に支持した⁴⁾。ヨーロッパ系の移民が形成したエスニック・エンクレイブは、移民の子孫たちが自らのルーツをたどる「遺産観光 heritage tourism」のスポットとして文化的価値を再発見された⁵⁾。また、非白人マイノリティであるアジア系コミュニティの中でも、エスニック・エンクレイブの保存を推進する活動が活発化してきた⁶⁾。アジア系のエンクレイブに歴史的・文化的価値を見出し保存の対象とすることは、アジア系移民のアメリカ社会に対する貢献を認識することであると、アジア系コミュニティは考えるようになったからである。こうして、かつては非アメリカ的な移民集団のゲットーとして主流社会から周縁化されたエスニック・エンクレイブは、アメリカの多文化主義を代表する文化遺産として肯定的な意味を与えられ、「移民国家アメリカ」の国民の物語の中に包摂されているのである。

本稿は、1990年代末以降、サンフランシスコをはじめとするカリフォルニア州の日系アメリカ人コミュニティの間に活発化した日本町保護運動に着目し、日系コミュニティがどのようにして日本町という物理的空間をエスニック・アイデンティティのシンボルとして再定義し、永続化しようとしているのかを明らかにすることを目的としている。その中でも特に、2000年以降サンフランシスコ日本町の日系コミュニティが実施してきたいくつかのプロジェクトについて考察する。日系コミュニティの指導者たちは、ランドマークの建設や、ウォーキング・ツアーの実施、また、日本町に関する記念書籍の出版⁷⁾などのプロジェクトによって、日本町の歴史的価値を高め、その物理的空間を恒久的に保護することの必要性を強調してきた。それは同時に、日本町を聖地化し、その場所に日系アメリカ人の歴史のマスター・ナラティヴを刻印することである。一世紀以上前にアメリカにやってきた日本人移民「一世」が定住し、苦難の道を歩みながらも、世代を重ねるうちに主流社会から受け入れられ、愛国的な日系アメリカ人となる――。日本町はこうした語りを再生産することで、「移民国家アメリカ」のナラティヴを強化していく

のである。

本稿ではまず、サンフランシスコ日本町の歴史を概観し、その発祥から現代までの歩みをふりかえる。次に、1990年代末以降の日本町保護運動のロビー活動がもたらした具体的な施策や条例を説明する。次に、近年日本町に新しく導入されたランドマークとウォーキング・ツアーを分析し、それらが日本町という場所にどのような歴史を刻印しようとしているのかについて考察する。

1. サンフランシスコ日本町の歴史

サンフランシスコ日本町（Japantown）はダウンタウンから2キロほど離れたウェスタン・アディション地区に位置する。その発祥は1906年であり、アメリカ本土に現存する日系コミュニティの中で最も長い歴史を持つ⁸⁾。だが、その一世紀におよぶ歴史の中で、その役割は常に変化してきた。第二次世界大戦以前、日本町は日本人移民が集中的に居住する「日本人町」であった。現在では日本人の集住地区というよりは、日本や日系の文化を象徴する「日本町」としての側面が強い。

最初の日本人「移民」が1869年にサンフランシスコに到来した後、1880年頃までに多くの日本人移民は中国人移民の集住地区であるチャイナタウンに隣接する地域に集住するようになり、これが最初の「日本人町」といわれている⁹⁾。そこは、白人居住区には住むことができない、貧しい労働者階級が集住する地域であり、日本人移民のための安宿、レストラン、公衆浴場、その他小さな商店が並んでいた。しかし、1906年のサンフランシスコ大地震はダウンタウンの広範囲に甚大な被害を与えたため、日本人居住者の一部が現在の日本町が位置するウェスタン・アディションに移り住んだ。

20世紀に入ってから、日本人のアメリカへの移民は徐々に制限されるようになり、1924年の移民法改正によって事実上停止した。もともと日本人移民のほとんどは出稼ぎ労働者であり、アメリカでの滞在を一時的なもののみなしていた。日本へ帰国した者も多数いたが、すぐに帰

国しない者は日本から呼び寄せた配偶者と家庭を築き、子供が成長するにしたがって、アメリカに永住する意志を持つようになった¹⁰⁾。1920年代から30年代にかけて、サンフランシスコ日本町はそうした長期滞在の日本人移民によって発展し、最盛期には約5000人の日本人・日系人が居住し、200以上のエスニック・ビジネスが経営されていた¹¹⁾。

1941年12月7日に日本海軍がハワイの真珠湾を爆撃し、日米が戦争状態に突入してからは、アメリカに居住する日本人とその子孫たちの生活は暗転した。多数の日系コミュニティの指導者がスパイ容疑で次々に逮捕され、大統領令9066号によって、西海岸に居住する約12万人の日本人移民とその子孫は内陸部に建設された収容所（internment camp）への強制的な移住を命じられた。日本人移民が去った後の日本町には、仕事を求めて南部から移住してきたアフリカ系アメリカ人が流入した。

戦後、強制収容所から解放された日系人は徐々にともとも居住していた西海岸に帰還し、サンフランシスコ日本町も戦前のにぎやかさを取り戻しつつあった。そのような中、1950年代から60年代にかけてサンフランシスコ市政によって行われたウェスタン・アディション地区の再開発は、日系エンクレーブとしての日本町を観光地に一変させた。日本人や日系人に加え、日本町の南側に集住していたアフリカ系アメリカ人を含む8000人以上の居住者が立退きを強いられ、6000戸以上の低所得者用住宅が取り壊された。それにかわって新たに建設されたのが、日本企業によるビジネス複合施設である日本文化貿易センター（現ジャパンセンター）であった¹²⁾。日本町は当時アメリカ市場に進出しつつあった日本企業のショーケースとなり、日本車のショールームやカメラなどの日本製電化製品の販売店、歌舞伎が観覧できる日本食レストラン、日本の高級ホテルが並んだ¹³⁾。日系三世を中心に立退きや観光地化に反対する運動が組織されたが、このような変化をとめることはできなかった¹⁴⁾。

2. 日本町保護運動

その一方で、再開発の頃から日系人人口の都市から郊外への流出はす

で顕著になっていた。多くの日系アメリカ人が社会的・経済的な上昇を果たして模範的マイノリティと呼ばれるようになり、三世以降の若い日系人は都市部の日系コミュニティに積極的にかかわろうとしなくなった。日本町はもはや日本人移民が集住し、日常生活を営む場ではなく、次第に日系人のエスニック・シンボルとしてとらえられるようになった。

1965年に移民法が改正されて以降、アジア諸国から大量の移民がアメリカに流入し、アジア系移民によるエンクレイブが都市部に次々と形成された。チャイナタウンは後続の移民の流入によって活気を取り戻し、コリアタウンやリトル・サイゴンなどの新しいエスニック・タウンが生まれた。しかし、戦後急激な経済成長をとげた日本からの移民は少数にとどまり、その日本人移民も戦前のように日本町に集住することはなかった。

再開発によって観光地化された日本町は1990年代から次第に活気を失い始めた。日本のバブル経済崩壊によって、多くの日本企業はアメリカからの撤退を余儀なくされ、日本町のビジネスを利用していただ日本人駐在員の数は激減した。また、移民一世から数世代に渡って受け継がれてきた家族経営の小規模ビジネスは後継者を見つけることができず、次々に消えていき、やがて中国系や韓国系のビジネスにとってかわった。2000年の国勢調査によれば、日本町での日系人口はたった8.8パーセントにすぎず、最も多いのが非ヒスパニック系の白人(52.6%)で、それに続くのがアフリカ系アメリカ人(14.4%)である。中国系(8.7%)や韓国系(5.9%)といったアジア系居住者の数も日系人口にせまる勢いで増加している¹⁵⁾。

こうした都市部の日系エンクレイブの著しい衰退は、サンフランシスコだけでなく、同じように日系企業によって再開発されたロサンゼルス小東京やサンノゼ日本町でも見られた。この状態に危機感を募らせ始めた三世を中心とするカリフォルニア州の日系コミュニティ指導者たちは、異なる地域の日系コミュニティ間の連携を深めるため、1998年に

はロサンゼルスで、2000年にはサンフランシスコで日系コミュニティ全体の将来を模索するための会議を開催した。サンフランシスコでは、1998年に「日本町計画、保存、開発タスクフォース（Japantown Planning Preservation, Development Task Force）」がサンフランシスコ市長と再開発局の協力により発足し、約50人の日本町コミュニティの代表が参加した。この組織は現在も非営利団体ジャパントウン・タスクフォースとして活動を続けている。また、2001年には日系コミュニティのロビー運動が結実し、カリフォルニア州知事はサンフランシスコ、ロサンゼルス、サンノゼの3つの日本町保護のための基金45万ドルを提供する上院法案307に署名した。

日本町保護運動をさらに加速させたのは、2006年に日本町が特別用途区域（Special Use District、以降SUD）としてサンフランシスコ市から指定を受けたことである。この条例は日本町の物理的な境界線を定め、場所そのものに「日本・日系アメリカ文化」という特有の文化的アイデンティティを与えた¹⁶⁾。つまり、今後日本町におけるすべての土地利用はこの文化的アイデンティティに適合するものでなければならなくなった。

SUD制定の引き金になったのは、再開発の頃から日本町の不動産を多く所有・経営してきた日本企業、近鉄アメリカの撤退である。2000年の時点で、近鉄アメリカはホテル二棟、ボーリング場、ジャパンセンターのショッピング・モール二棟を所有・経営していた。しかし、ボーリング場は売却されて高級コンドミニアムに替わり、2006年に残る全ての不動産がユダヤ系イラン人の開発業者に売却された。再開発で日本町にやってきた近鉄を当初日系コミュニティは歓迎したわけではなかったが、近鉄の存在は日本町の「日本的」要素の保持に大きな役割を果たしていた。日本の「血」をひかない新しい所有者がさらなる開発によって日本町から日本文化的要素を消してしまうことを危惧した日系コミュニティ指導者たちは、日本町のSUD指定を求めてロビー活動を行った。市議会議員の支援のもと異例のスピードでSUDは可決され、日本町と

という場所のアイデンティティは法的に保証されるようになった。

3. 日本町ランドマーク

SUD の指定に加え、サンフランシスコの日系コミュニティ指導者たちは、ランドマークの建立やウォーキング・ツアー・プロジェクトの実施により、日本人移民の歴史が始まった場所としての意味を日本町に積極的に与えてきた。現在の日本町はもはや多くの日本人や日系人が居住する場所でもなければ、日常生活を営む場所でもない。現代の若い日系人の多くは郊外で育ち、日系コミュニティと直接的なつながりを持つことなく、中流階級の暮らしを営んできた。こうした現状において日本町が果たす役割は、そのような現代の日系アメリカ人が日系人としてのエスニック・ルーツに回帰するための物理的な空間を提供することである。

2005 年 6 月、サンフランシスコ日本町で新しいランドマークが披露された。ブロンズと石で造られ、3メートル程の高さで三角柱の形状をしたこのランドマークの3つの側面には「一世パネル」「強制収容パネル」「文化パネル」というレリーフがあり、それぞれ順に第二次大戦前、戦中、現在という異なる時代を生きた日本町の日系人の姿が描かれている¹⁷⁾。このランドマークのデザインを手掛けたのは、数々の記念碑を制作した著名な彫刻家のユージン・ダウブ (Eugene Daub) とバークレーで活動する彫刻家ルイス・クエイタンス (Louis Quaintance) である。また、サンフランシスコに住む日系三世の詩人で、フェミニスト、コミュニティ活動家としても知られるジャニス・ミリキタニによる詩がレリーフを飾った。全く同一のランドマークが、後に、ロサンゼルス小東京とサンノゼ日本町にも設置された。このランドマークの制作は、カリフォルニア州の公教育プログラムのための基金 (California Civil Liberties Public Education Program) と同州の住民提案 40 に基づく環境法案 (State Proposition 40 of California Clean Water, Clean Air, Safe Neighborhood Parks, and Coastal Protection Act of 2002) によって実現することになった¹⁸⁾。こ

のランドマークは日系アメリカ人の歴史のマスター・ナラティヴを表象するだけでなく、その中で日本町がいかに重要な役割を果たしてきたかを強調している。

「一世パネル」で描かれているのは、日本町で商売を営む典型的な一世の家族の姿である（図1）。西洋風のスーツとエプロンに身を包んだ一世の男性は、野菜があふれんばかりに入った大きなバスケットを両手で持ち、自信に満ちた笑みを浮かべている。その傍らにはほうきを持った妻が寄り添い、人形を抱えたおかつぱ頭の幼い娘が寄り添う。男性と

同様、妻と娘の表情も晴れやかで満足そうに微笑んでいる。背景には、日本語と英語の看板が混在した様々な商店が立ち並び、戦前期の繁栄した日本町の風景が描かれている。この戦前の日本人家族の描画に、ミリキタニは次のような詩を添えている。

1. 一時的な滞在者にすぎない者も
明確な展望を持つ者も大地に手を
ひろげ
未来への希望を収穫する
このアメリカで¹⁹⁾



図1
日本町ランドマーク「一世」パネル
2008年3月筆者撮影

前述したようにもともと日本人移民の多くは故郷に錦を飾ることを目指した出稼ぎ労働者であり、いずれは日本に帰国するつもりであった。しかし、アメリカで思うように財を成すことができなかった者たちは滞在を延長するうちに、アメリカに移民として定住する

ことになった。また、カリフォルニアの日本人移民の多くは農業に従事していた。戦前期の日本町を描いたこのパネルは、家庭を築き始めた一世の間でアメリカ永住の意志が芽生え始め、決意も新たにアメリカでの明るい未来に期待を寄せる情景を描いている。

戦中期のパネルには、強制収容所への移動を余儀なくされ、日本町を立ち退く直前の日系人家族が描かれている（図2）。スーツケースを手にした祖母から孫までの家族7人三世代が互いをなぐさめるように身を寄せ合い、不安げにうつむく。スーツケースの上に弟と一緒に腰掛けた少女は今にも泣き出しそうな表情の弟の肩を抱き寄せ、祖母は孫であるその少女の肩に手をやり、もう一方の手で数珠を握り締める。一家の大黒柱である二世の男性は年老いた母親の肩に手をやりながら、物悲しい表情で中空を見据えている。幼い乳飲み子を抱いた母親はその後ろで暗い表情を浮かべている。にぎやかな戦前期の日本町の様子は一変し、日英パイリンガルの商店の看板は“Must Evacuate”「避難せよ」という立退きを命じる旗印に替わっている。住居の2階窓には外から板が打ち付けられ、1階には銃を携えた兵士がいかめしい表情で出入り口扉に立ちふさがっている。

ミリキタニは詩の中で、日系人とその子孫が収容された10箇所の強制収容所の名前を挙げている。

2. 旅は足留めにあい 不正義によって拘留された



図2
日本町ランドマーク「強制収容」パネル
2008年3月筆者撮影

マンザナー、ツールレーク、ポストン、ヒラ・リバー、
ミニドカ、ハート・マウンテン、アマチ、
トパーズ、ローワー、ジェローム

私たちはどうになってしまうのだろう

当時幼かったミリキタニ自身もアーカンソー州のローワーに収容された²⁰⁾。一世がかつてアメリカに寄せた未来への希望は、戦時の強制収容体験によって引き裂かれた。日本町はそれまで築き上げた財産を失った日本人・日系人が精神的に深く傷ついて強制収容所へ向かう舞台となったのである。



図3
日本町ランドマーク「文化」パネル
2008年3月筆者撮影

一方、現在の日本町を示すパネルでは、コミュニティ・フェスティバルの風景が描かれている（図3）。目を惹くのは、扇子を手にして着物姿で踊る女性と、吊り下げられたお祭り用の提灯飾りである。かたわらではTシャツ姿の少女がその踊りをまね、祭り用の半被を着た男性も踊りに加わる。背景には、半被姿でタイコを叩く人々の姿や、サンフランシスコダウンタウンの高層ビルに紛れて、現在の日本町にある五重の塔が描かれている²¹⁾。他二つの過去を描いたパネルでは、日系人の家族は洋服を着用し、西洋的な文化を受容しているが、現代を描いたパネルでは、日系人は和服を着用し、日本の伝統的な風習を守っている。3つのパネ

ルに描かれた人物の服装だけを見ていると、それは時間の流れに逆行しているようでもある。移民一世や二世はアメリカ主流社会に同化しようと努力してきたが、現代のパネルが表象するのは、三世や四世の日本文化というルーツへの回帰である。

こうした日本的な現在の描写に寄せられたミリキタニの詩には、「自由」「正義」「平等」など、アメリカの美德とされる概念がちりばめられている。

3. 運命へのステップ

祖先たちを称えて私たちは踊る
私たちの祖国 (home) と
夢を追う自由を求める祖先たちを
私たちの声が正義への道を切り開く
全ての人々に平等な権利を与える正義

私たちは広がっていく
何世代もの上に成り立つ私たちの未来
私の人生から
数え切れない人生が生まれる

旅は続く・・・

現代の日系人は日本という自らのエスニック・ルーツにたどりつき、移民一世に対する感謝と称賛をあらわして日本町で開催される祭りで踊る。祖先の一世は自由を求めてアメリカに到着し、アメリカを永住の地として選んだ。戦時中の強制収容という不正義によって、一世がアメリカに寄せた期待は裏切られたが、後に三世を中心に展開された強制収容の補償を求める運動の結実によって不正義は正された。ミリキタニも補償運動に積極的にかかわった一人である。「自由」「正義」「平等」とい

うアメリカの美德は、単に西洋的な文化を受容し、同化することによって守られるのではない。「自由」「正義」「平等」を求めた祖先の移民一世に敬意を表し、ルーツである日本文化を実践することは、現代の多文化主義的なアメリカ社会において、極めてアメリカ的な行為なのである。

ランドマークの3つのパネルが表象するのは、日本町を舞台にした典型的な日系アメリカ人の歴史物語である。出稼ぎ労働者だった日本人移民は日本町で商売を営むうちにアメリカでの生活に将来の希望を見出し、異国の地に根をおろした「一世」となって日本町を繁栄させていった²⁾。その後、戦時の強制収容という「不正義」は一世がアメリカに期待した「自由」「平等」という理念を裏切り、日本町から日本人の血をひく者すべてを排除した。だが、強制収容から半世紀以上を経た現在、過去の「不正義」は正され、日本町は今もなお若い日系人世代が祖先のルーツを学び、その文化と祖先の功績に敬意を表する場所であり続けている。ランドマークが表象するサンフランシスコ日本町は日系アメリカ人の歴史の出発点であり、現代の世代がルーツを求めてたどりつく最終地点なのだ。

4. 日本町ウォーキングツアー

2007年12月、サンフランシスコ日本町で活動する非営利団体、北加日本文化コミュニティセンターは「サンフランシスコ日本町歴史散歩」(San Francisco Japantown History Walk)というセルフガイド式のウォーキング・ツアーを公開した。観光客はツアーのコースにしたがって日本町を散策しながら、各所に設置された16枚の記念パネルの説明を読んで、日本町および日系アメリカ人の歴史や文化を学べるようにつくられている(図4)。このウォーキング・ツアーは、カリフォルニア州公園レクリエーション局の助成金と同州の公教育プログラムに関する基金により制作された。説明パネルの中には、強制収容やその補償運動、または日系人のスポーツリーグなど、日系アメリカ人の共有する経験が含ま

移民史を「場所」に刻印すること

れている。また、日本町が誕生した時から三世代に渡って受け継がれている家族経営の商店、日系の教会や仏教寺院などローカルな情報も含まれている。セピア調にデザインされたパネルは日本町の歴史にとって意義深い建造物のかたわらなどにそれぞれ設置され、古い写真とともに当時の様子を語る。以下に示すのが16枚のパネルの表題である。

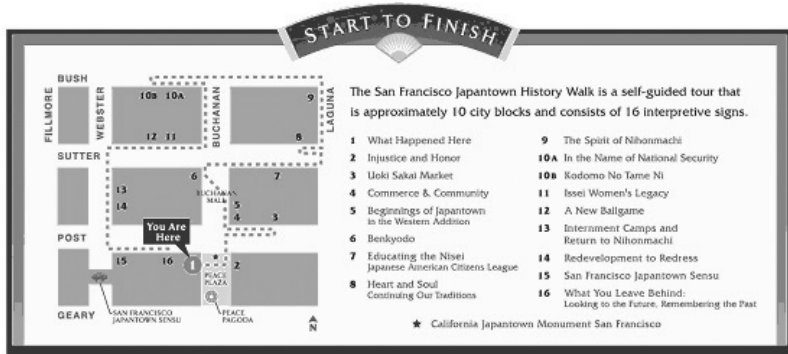


図4 サンフランシスコ日本町歴史散歩地図

出典：©2008 NDD Creative. Created under California Proposition 40 (2002) through a grant to the Japanese Cultural & Community Center of No. California. 註23を参照。

1. ここで何が起こったか²³⁾
2. 不公平と名誉：日系コミュニティの性格形成
3. 魚喜・サカイ・鮮魚店 1906年
4. 日系コミュニティ初期の商人たち
5. ウェスタン・アディションでの日本町のはじまり
6. 勉強堂・菓子屋 1906年
7. 日系二世の教育
8. 心と魂
9. 日本町における宗教
- 10a. 国家安全保障の名のもとに
- 10b. 子供のために
11. 一世女性たちが残したもの

12. 日系コミュニティにおける新しいスポーツ
13. 強制収容所と日本町への帰還
14. 再開発から賠償訴訟へ
15. サンフランシスコ日本町の扇子
16. 私たちが伝えていくもの・未来に目を向け、過去を忘れない

このウォーキング・ツアーは上記のような記念パネルを設置することによって、日本町という場所に歴史的な意義を埋め込んでいる。パネルに記された詳細な歴史をじっくり読む人はそれほど多くないかもしれないが、人々は定められたコースを「歩く」という身体的な経験を通して、日本町の境界や領域を内在化していく。

しかし、このコースは日系アメリカ人の歴史・文化にとって重要な部分だけを切り取ったものであり、重要でないものあるいは日系文化にそぐわないものは避けられているようだ。たとえば、このコースでは、ラグナ (Laguna) 通りとポスト (Post) 通りでハンゲル文字の大きな看板を出している韓国系商店の前は通らない。ジャパンセンターの南側ゲアリー (Gary) ブルバード沿いに並ぶ中国系・韓国系オフィスやフィルモア (Fillmore) 通りのアフリカ系アメリカ人のコミュニティも同様にコースからは除外されている。だが、コースの途中でゲアリーブルバード沿いのジャパン・センターに足を踏み入れれば、アジア系の若者に人気の高い日本のアニメグッズを販売する商店が容易に見つかる。現在、公式および法的に日本町と定義される空間では、実際のところ人種やエスニシティの異なる様々な文化が共存し、現代日本の新しい文化も流入している。しかし、多くの日系アメリカ人たちにとって、そうした「異文化」は日系人の歴史的遺産を保存する日本町という場所のアイデンティティを代表するのにふさわしくないと考え、存在感を増す「異文化」を脅威とみなしてきた²⁴⁾。日本町の多文化的現状において、ウォーキング・ツアーは日本町という場所の文化的アイデンティティを日系アメリカ人の歴史と文化で独占し、永続化しようとする試みの一つといえるで

あろう。

おわりに

日本町保護運動を推進するカリフォルニア州の日系コミュニティ指導者たちはランドマークやウォーキング・ツアーを通して、日本町という場所に日系アメリカ人の歴史を刻印してきた。日本町ランドマークの戦前から戦中、現在にかけての複数世代に渡る表象は日系アメリカ人の歴史のマスター・ナラティヴを強化し、日本町をその歴史が始まった場所として聖地化する。ウォーキング・ツアーでは、ツアーに参加する者は日本町の各所に配置された記念パネルを見ることによってその場所の過去を学ぶだけでなく、自分の足で「歩く」ことによって日本町の領域を内在化していく。

日本町に刻印される日系アメリカ人の歴史は、アメリカ国民の物語の一部として「移民国家アメリカ」というナラティヴを強化していく。日本町という場所が強調するのは、自由と平等を求めて渡米した戦前の一世、愛国心を示してアメリカ主流社会に受け入れられた二世、過去の不正義を正し、祖先の文化的ルーツに敬意をはらって、アメリカの多文化社会を支える三世以降の世代、といった直線的な物語である。その中には、結果的にアメリカを去った日本人出稼ぎ労働者や、戦後に入ってきた日本人移民、さらにはグローバル化した現代世界において国境の間を何度も往復している日本人ビジネスマンなどは含まれない。現代の日系コミュニティの指導者たちが保存を要求する日本町という場所は「移民国家アメリカ」の語りを再生産する装置の一つとして機能していくのである。

註

- 1) Japantown Planning Preservation and Development Task Force, *Concepts for the Japantown Community Plan* (San Francisco: n.p., 2000), 1.
- 2) 2000年のアメリカ国勢調査によると、カリフォルニア州には、全米

- に住む日本人と日系アメリカ人の 34% にあたる約 40 万人が居住している。一方、日系人口が集中するハワイにおける「日本町」は保存の対象とされなかった。ハワイ在住の日本人と日系アメリカ人の総数は 2000 年の時点で約 30 万人であり、ハワイ州人口の約 4 人に一人が日本人の血を引く。
- 3) 『北米毎日』2002 年 1 月 1 日。
 - 4) Diane Barthel, *Historic Preservation: Collective Memory and Historical Identity* (New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1996).
 - 5) M. R. Esman, “Tourism as Ethnic Preservation: The Cajuns of Louisiana,” *Annals of Tourism Research* 11 (1984): 451-67; Steven D. Hoelscher, *Heritage on Stage: The Invention of Ethnic Places in America’s Little Switzerland* (Madison: University of Wisconsin Press, 1998).
 - 6) Gail Lee Dubrow, “Asian American Imprints on the Western Landscape,” in *Preserving Cultural Landscapes in America*, ed. Arnold R. Alanen and Robert Z. Melnick (Baltimore: Johns Hopkins University, 2000); Linda Trinh Vo, *Mobilizing an Asian American Community* (Philadelphia: Temple University Press, 2004).
 - 7) 例えば、Japanese Cultural and Community Center of Northern California (JCCCNC), *Generations: A Japanese American Community Portrait* (San Francisco: JCCCNC, 2000) や Japantown Task Force, Inc., *San Francisco’s Japantown* (San Francisco: Arcadia, 2005)。
 - 8) Japantown Task Force, “Japantown Historic Context Statement,” Prepared for Landmarks Preservation Advisory Board (October 2003).
 - 9) Suzie K. Okazaki, *Nihonmachi: A Story of San Francisco’s Japantown* (San Francisco: SKO Studios, 1985), 35.
 - 10) Yuji Ichioka, *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrant, 1885-1924* (New York: Free Press, 1988).
 - 11) Gary Kawaguchi and Shizue Seigel, “San Francisco’s Prewar Japantown: The Shaping of a Community,” *Nikkei Heritage* 12, no. 3 (summer 2000): 5.
 - 12) Shizue Seigel, “Nihonmachi and Urban Renewal,” *Nikkei Heritage* 12, no. 4 (fall 2000): 7.
 - 13) 「明日のサンフランシスコジャパントウンを語る」, 『月刊もん』, 2003 年 1 月, 4-6 頁。
 - 14) Committee Against Nihonmachi Eviction (CANE), *One Year of Struggle* (San Francisco: CANE, [1974]).
 - 15) U.S. Bureau of the Census, *Census 2000*, Summary File 1, P1, P9, PCT7. 日

本町の地理的な定義は国勢調査区域 152, 155, 159 とする。

- 16) 日本町の特別用途区域指定については、拙稿 Yoko Tsukuda, “Place, Community, and Identity: The Preservation Movement of San Francisco’s Japantown,” *Pacific and American Studies* 『アメリカ太平洋研究』9 (March 2009): 142-159 を参照。
- 17) Louis Quaintance, “Japanese American Landmark Memorial,” <http://www.quaintancesculpture.com/commissions.html> (2011 年 1 月 4 日閲覧)
- 18) California Japanese American Community Leadership Council, “Programs: California Japantown Landmarks Project,” <http://www.cjaclc.org/programs/landmark.htm> (2011 年 1 月 4 日閲覧)。
- 19) これ以降、断りが無い限り日本語訳はすべて筆者による。詩の原文は、Japantown Task Force, Inc., *San Francisco’s Japantown* より引用。
- 20) “Janice Mirikitani,” in *Encyclopedia of Japanese American History: An A-to-Z Reference from 1868 to the Present*, ed. Brian Niiya and Japanese American National Museum (New York: Facts on File, 2001), 234-35.
- 21) 同じランドマークはロサンゼルス小東京サンノゼ日本町にも後に設置されたが、このランドマークはサンフランシスコ日本町を中心テーマに制作されたようである。
- 22) 米山は、第二次大戦でアメリカのために戦った愛国的な日系二世兵士の語りは、戦後の日系アメリカ人史の枠組みに大きな影響をもたらし、戦前の日本人渡米者を「在米日本人」から「一世」へと転換したと論じる。米山 裕 「「日系アメリカ人」の創造——渡米者（在米日本人）の越境と帰属」『20 世紀をいかに越えるか——多言語・多文化主義を手がかりにして』西川長夫・姜尚中・西成彦編、120-143 頁、平凡社、2000 年。
- 23) 以下は 3、6、15 番目を除いてすべてウォーキングツアーのパネルに実際に記されている日本語訳である。表題以外では和訳は記されていない。ツアーのパネルを製作した会社 NDD Creative のホームページですべてのパネルを閲覧することができる。NDD Creative, “San Francisco Japantown History Walk,” <http://www.nddcreative.com/sfjhw.htm> (2011 年 1 月 8 日閲覧)。
- 24) *Nichibei Times*, 1996 年 1 月 1 日。

